問題関心を自発的な活動へと変えること

活動先：南知多町立師崎小学校
クラス：岡多枝子先生

１年間のサービスラーニング活動を振り返ると、私の年間を通して行ってきた活動の中心は、他の班そしてサービスラーニングのゼミを共にする他ゼミの活動内容には、類を見ることのなかった教職としてのサービスラーニング活動として位置づけることのできる活動であった。私が活動を振り返って感じ得たことの大きな収穫は、自らが持つ問題関心を自らの体験をもって調査し、学びに生かしていこうと考えた動機を、これまで大学が築き上げてきた実績やそのネットワークに頼らない、いわば大学側に頼らずに私たち自身が教職の世界に飛び込み、活動のレールの開拓を行っていけたということ、そしてそこでの活動、出会いを通して得られた経験にあったと感じている。これまで私は物事を０の状態から段階を踏んで自らの手で全て築き上げていくという体験と、そして成し遂げていったという経験が乏しく、何事においても自分で何かを成し遂げるという達成感を素直に味わったことがなかった。以上の理由からこの１年間を通して築き上げてきた活動は、私に自信をつけてくれた。

2011/１/13　師崎小学校グラウンド　撮影者：梅田

私たちが教職のサービスラーニング活動を行うことができるきっかけとなった最初の動機は、地域の小学校における特別支援学級をめぐって、通常学級と特別支援学級へ在籍している特別なニーズをもつ児童と通常学級へ在籍している児童の双方の児童間において、それぞれに教育指導的観点からの取り組みの中における相違点、工夫されている点についての調査、そして特別支援学級へ在籍している児童との学校生活の中で、特別支援学級へ在籍している児童と、通常学級へ在籍している生徒における関わりの中で、双方へ影響しあっている点が存在するのであればそれはどのような効果を及ぼしているのかということについて調査を行いたいということが発端であった。

そこでまず私たちは５月中旬上旬に知多半島地域の小学校から特別支援学級を設置している学校を探し、調査動機の旨をお伝えして訪問の申し込みをお願いしたところ、南知多町立師崎小学校に許可を頂けることになった。そこから年間を通して６月３日師崎小学校へ事前訪問させていただいた。ここでは訪問目的の確認、そして対応してくださった先生方から師崎小学校についての諸説明を受け、学校内を見学させて下さり、特別支援学級であるひまわり学級も見学させていただいた。

６月１６日には初夏の恒例行事であるプール清掃に活動参加させていただいた。ここで

は、ただ単に高学年の児童達とともにプールを清掃させていただけただけでなく、特別支援学級へ在籍する２名の児童（以下Ｓ君Ｙ君）に付き添わせていただきながら活動をさせてもらうことになった。この活動をとして学んだことの１つは、自分たちがこれから使用する共有の場であるプールを使用当事者である児童達自身の手で清掃するという活動の場をもつことによって、利用目的だけでなく学校内公共の場として自分たちの手で大切にしていくことの意味を児童達は学べたのではないかと感じたことと、このような何気ない活動や行事１つ１つにも教育的目的、目標、そして児童達への願いが込められているのだということを身をもって感じ勉強させられたことであった。２つめは、高学年の児童達とＳ君・Ｙ君との関わりに注目して活動を行っていたことからの気付きである。みんながともに協力し合い、とくに声かけなどが自然に行われている様子がとても印象的で、学級が異なることに関しての隔たりや距離感は感じられなかったことだ。これらの背景として考えられるのは、日頃からの双方の児童間へ対する教育的配慮がきちんと行われているのではないかということと、児童たちの住む地域柄、そして育ち方からの影響や子どもたち同士の心の豊かさも関係しているのではないだろうかという考察であった。今教育現場では特別なニーズ、個のニーズをもった子どもたちへの対応や教育も注目させている問題のひとつであると認識している。それらの考察への検証や研究は、個人的問題関心の見地からも回を重ねてこれからも慎重に行っていく必要があると思っている。

９月２５日には師崎小学校運動会・町民体育大会へ参加させてもらい、運動会運営から児童達の補助に携わらせていただくことができた。早朝の登校時間前の準備にはじまり職員会議への参加、１日の流れ・１日を通しての目標・注意事項の確認、そして運動会への参加、片付けに渡る充実した１日を過ごさせてもらうことができた。この活動では、「１日を通しての教師の動きに注目して学ぶ」という個人的目標を立てて参加していたので、教師を志す学生としての視点から１日に渡る先生方たちの動きを注意深く意識して観察し、教師としての資質そしてあり方を大いに学ばせていただいた。また、保護者や町民の方々と接する機会を多く持てた１日でもあり、師崎という地域色のよさやその活気ある雰囲気に和まされ、児童達が育ち合っている地域の空気にも触れさせてもらう事ができたことに感動を覚えた。そして、保護者・地域住民と児童たちとの関わりの中に、地域コミュニティーが希薄化してきているという危惧の念を抱かせる現代社会には珍しく、地域で支え合いや助け合いのような心が人々の中に大切にされているような、伝統的な付き合い方が残っていると感じさせられるような印象を受けたことも私たちにとってはとても大きな出来事の１つであった。この発見は新たな関心事の１つとしての認識となり、そこでの影響を受けて地域と教育との繋がりの大切さ、地域が教育に介入していくことの効果やその意味についても考えさせられていくこととなった。これからは、教育も学校だけが任されるのではなく、地域との関わりの中でともに学びあい支えあっていくという重要性への認識と、教育と地域とを結ぶ学びが組み込まれていくことが課題になってくると感じた。

１月１４日には追跡ハイキングが行われ、その活動においても参加させていただくことになった。追跡ハイキングとは、全校生徒が縦割り班（なかよし班）の８班に分かれ海コース、山コースに分かれて目印を頼りにミッションをこなしながら道なき道を散策しチェックポイントを目指し、協力しあいながらゴール地点の小学校を目指すという師崎小学校の恒例行事である。私は、補助を必要とする児童が所属している班の子どもたちと１日行

動をともにさせてもらうことになった。コースどおりに進んでいくと、小学生の子どもたちだけでは進めないであろうと予想されるようなサバイバル級の道々が現れる。そんな中を子どもたちは弱音モ吐かずに黙々と進み続ける。１日を通した上級生から下級生に渡る子どもたち同士の助け合い、そしてチームワークの様子に私は始終感動し、そしてこんな小さな体をもつ子どもたちが秘めている計り知れないほどの内なるパワーのすばらしさに終始圧倒されていた。改めて子どもという存在のもつあらゆる力と可能性を学ばせてもらう事ができ、私にとって子どもとはこれまで以上により魅力を増す存在となった。また、子どもたちとともに山々をかき分け海沿いの道々を進んでいくにあたって、師崎という豊かな自然に恵まれた土地を、身を持って実感することができ、これまで関わらせていただいてきた子どもたちを伺っていても、自然豊かな土地で生まれ育ち、そのようなに囲まれて生活をしているという事実が、いかに子どもたちの育ちにとって影響しているのか、そして教育的観点からみても大切なことであるのかということがよく理解できた。そして、このプログラムを実行するにあたって先生方が事前準備をどれだけ慎重に重ねてこられてきたのかということがよく伝わってきた。これも安全面の配慮という大前提事項だけでなく、この経験を生かして成長してほしいと願う先生方たちの子どもたちへの熱い気持ちの上に学校全体をあげての取り組み（実際に、この日は校外での地域の方々の見守りも見受けられた）が存在しているのだということが理解できた。

2010/1/13　師崎小学校グラウンド　撮影者：安部先生

以上をもって、この１年間の活動を通して学んだことそして得られたことは自分自身にとってこの上ない喜びであった。そして、その場で経験させていただいた内容の数々は将来の教師になるという夢へ対しても、そして未来へ向けてのプロセスである大学生活や、教師という職業に就くことが現実になった時への実践力へつながると確信している。

しかしその経験からの喜びの反面、サービスラーニングクラスでサービスラーニングを学んできた学生として、活動先の師崎小学校に対して、子どもたちそして先生方に対して何ができたのか、そして自分達が小学校の活動へ参加することによってどう感じとってもらえたのか、またどのような効果が生じたのかということについて、自分たちの活動を教職のサービスラーニング活動としての位置づけについて深く悩み、班員とともに議論を交わしてきた。私たちの活動はボランティアではなくサービスラーニング活動でなければならなかったからである。よって、これらの活動をまとめるにあたって１年間の間に活動参加と並行しながら、大きな葛藤とジレンマがあったというプロセスも私の振り返りにとっては欠かすことができなかったものであると考えている。結果的にはそれらの葛藤やジレンマをもとに自分達の活動の意味をどう見出だしていくのか、という模索は自分の成長にとってとても重要な意味をもっていたものであったと感じた。

しかしそれらも含めて活動のまとめに差しかかっていた時に行った今年度最後の活動後の先生を含めた振り返りと反省会の中で、これまでの自分たちの活動の意義を見出すこと

ができた。それは、先生に言っていただけた「あなたたちが来て活動に参加してくれることによって、私たち教員もすごく助かっている。そして大学生というとても新鮮な人物がこの師崎小学校へ来てくれることによって、子どもたちもとても喜んでいると同時にとてもいい効果が生まれている。今後も引き続き来てくれると本当にありがたい」と、いう言葉であった。私はこの言葉をいただけた時に計３回という活動期間や、活動先との関係の面からも、具体的な助言や何かの問題に一緒に取り組み問題解決を図っていこうなどとすることはできず、自分たちの役割は果たせていなかったと反省し落ち込んでいたのだが、この活動において私たちは学校側に対して何ひとつできなかったということではなかったのだということを知り、ほんの小さな効果であったのかもしれないが、そう言っていただけた言葉と思いから私は大変な喜びを感じ、自分の活動意義を見出すことができた。

最後に、私たちは師崎小学校の希望と私たちの希望が一致しているということ双方間で確認できたことによって、来年度も引き続き継続して活動を続けさせていたけることとなった。もちろん今後も継続して活動をさせてもらうつもりである。そして自分達でレールを敷き開拓して得られた、活動内容、信頼関係、そして出会いを大切にして、今後は自分たちの活動を発信していくこともこれからの目標の１つとし、興味や関心を抱いてくれた人達も巻き込んで、活動の継続そしてレールの継続をさせていこうと考えている。そして自らが０から切り開いてきた活動経験をもとに、興味関心や問題意識を持っている事柄を自分の足で自分の目で自分の手で確認していきたい！と考えているけれども、どうしたらよいのかがわからないで悩んでいる人たちへ、自分にできることとして伝えることで力になれるのであれば進んでしたいと考えている。そして今後は、１年間の活動をもって個人的に興味関心を抱くことになった課題、特別なニーズをもつ子たちに対しての教育、インクルーシヴな教育についての学びを学問として深めていくこと、そして現場に足を運ばせて頂き活動を継続させていただくことをもって、問題意識を自分に投げかけ続け模索し学んでいきたいと考えている。